

序

廃棄物処理問題は都市経営や自治体経営を考える上できわめて重要な事柄であり、それは、人間が集住生活を営む上で未来永劫続く課題であるものと思われる。同時に、ごみの問題はその時代によってあり方が異なっており、現代日本におけるごみ問題もそうした時代的な部分を有しているといえるだろう。

今日の日本におけるごみ問題、特に家庭系の一般廃棄物に限って、その特徴を考えてみると、今回われわれが対象としたプラスチックごみの増加とその処理という点に求めることができるように思われる。プラスチックの生産が本格化したのは 20 世紀に入ってからであり、殊に、第二次世界大戦後、石油化学工業の飛躍的な発達とともに、プラスチックはわれわれにとって身近な存在となっていく。そして今日、プラスチックはわれわれの生活に不可欠なものとなっている。

その一方で、プラスチックは、それまでのごみ処理技術では対処しきれないさまざまな問題を生じさせている。90 年代に入って、日本においてもダイオキシンの問題がマスコミにぎわしたが、その原因は一部のプラスチックであるというのが大方の見方である。そして、皮肉にも、1960-70 年代に日本各地で発生したごみ戦争の根本的な解決手段とみなされていた焼却処理という手法が、ダイオキシンの主要な発生源として問題視されるという事態になっている。

このように、かつては画期的な解決手段であったものが、社会的な変化の中で陳腐化し、あるいは問題を発生させるというようなことはよくあることである。そうした状況に直面した場合、われわれには従来のやり方ではない新たな方法を模索することが必要とされるし、今日のごみ問題、特にプラスチック処理を中心的な課題としたごみ問題に対して、われわれは真剣に取り組まなければならない時期に来ている。

北海道教育大学旭川校社会学研究室では、2003 年度からごみ問題についての取り組みをはじめ、その成果を報告書としてまとめた¹。本報告書は、その成果を踏まえた上で、近年のごみ問題にとってきわめて深刻な問題であるプラスチックごみ問題を対照として取り上げたものである。本報告書は、2004 年度のコミュニティ計画演習に参加した 12 名の学生たちによる調査活動が基盤となっている。プラスチックごみについての文献、特に PET ボトルやプラスチック製容器包装に関する論文は、1990 年代後半になって膨大な量の蓄積がすでに存在しており、今回は文献やインターネット上の情報検索を中心に調査研究を進めていった。その情報量に圧倒され、当初予定していた聞き取りや PET ボトルの中間処理施設の見学は見送らざるを得なかったが、その欠落を補うだけの情報を集めることができたという点に関してはそれなりの自負がある。

¹ 内容については北海道教育大学旭川校のホームページ上でも公開されているので、関心のある方は <http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/research/staff/kado/mokuji.htm> を参照されたい。

昨年の調査に参加した学生が今回も 4 名参加し、それぞれ牽引役としてがんばってくれた。また、新たに参加した学生たちも、他の講義や活動もあって多忙である中、多くの時間を割いて取り組んでくれたようである。ここに学生たちの努力を讃えたいと思う。また、前期末にはすでに原稿を受け取っていたにもかかわらず、編者の怠慢によってすでに後期が終わらんとしているこの時期に発行がずれ込んでしまったことをお詫びしたい。

個人的な事柄としては、本年度 4 月、旭川市からの委嘱により、旭川市の第 7 次総合計画の市民意見をまとめる「市民まちづくり検討会議」の委員に就任する機会を得て、「ひとにやさしいまち分科会」の中で、他の委員の方々と廃棄物問題について議論する場をいただき、私の不十分な知識や考えを大いに改める機会となった。また、今年度の 7 月に、上川保健所管内衛生団体連合会研修会において、ごみ問題について話をする機会をいただき、早速今回の演習によって得られた知見と考えを中心に講演を行った²。その際の質疑応答においては、私の示した当面の解決策すら机上の空論であるといった手厳しいものも含めて、さまざまなご意見をいただいた。調査から得られる知見や主張は、それが市民にも理解可能な形に咀嚼されるのが理想であり、また、主張についても、一般の人には取り組み不可能な理想論を掲げるということも避けなければならない。現実的かつ効果的な知見や主張を、今後も追及していきたいと思う。

廃棄物の問題は、調べれば調べるほど奥が深いものである。それは、それだけ廃棄物をめぐる今日の状況が極めて困難で深刻であるということを意味しているようにも思える。社会学研究室では、今後も廃棄物に関する調査・研究を学生たちとともに続けて行きたいと考えている。そして、本報告書が、来年度以降の調査・研究の基礎となるとともに、多くの人々に有意義なものになることを願いたい。

北海道教育大学旭川校社会学研究室 角 一典

² 当日配布したレジュメは北海道教育大学旭川校のホームページ上で公開している。興味のある方は <http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/research/staff/kado/20040730.pdf> を参照していただきたい。